

細造ヲ入ベシ、コ椒モ入ベシ、十一月鳥タヽミ、鳥ノヒツタレカツヲ身ヲ、カマボコノミノ如ニシテ、下地ノ汁ヲカヘラカシテ、鳥ノ身ヲダシカツヲ身ニテトキテ入テ、少サマシテ山ノ芋ヲトロ、ニシテ入テ、甘海苔ヲモ入、山葵ノ辛ミナクバ、芥子、十二月カキ冷汁、カキヲカラナベエ入テ煎テ探上ゲ、能タヽキテ下地ノ汁ヘ入テカヘラカシテ、少サマシテ山芋ノトロ、ヲ入テ和ベシ、辛ハ古椒也、

〔今川大雙紙<sub>下</sub>〕食物之式法の事

一人前にて飯くふ様之事、人より後にくひ初め、箸をば人よりさきに置也、ひや汁をうくる時は、箸持たる手にて左のすわうの袖をかいて取て請べし、汁のさいしん引人の前に来る時、先すふて出す事、ひけふなり、又何とうまき二汁ひや汁也、共、かけてくふべからず、大汁請べし、もしひや汁などはくるしからず、又汁の中なる魚鳥の骨を折敷のすみへ取出す事、ひけふ第一也、

〔中島宗次記<sub>一</sub>〕ひやする請て、やがてすう事なかれ、飯をくひてすう物なり、

〔躰方明記<sub>四</sub>〕食に汁懸候事は、冷汁を懸候て能なり、但時宜によるべし、珍敷物などならば、本汁懸候ても不苦なり、

一常の食の時ひや汁をば、二の膳に組付て置なり、引冷汁は略儀なり、引冷汁の時はかさに請、左の方に置べし、

〔江家次第<sub>二十</sub>〕攝政關白家子書始

次二獻冷汁、次三獻熱汁、或及四五獻、

〔類聚雜要抄<sub>一</sub>〕一字治平等院御幸御膳<sub>元永元年九月廿四日、大</sub>

三寸五寸様器<sub>略</sub>○中 御汁物二度<sub>寒○汁○松茸、熱○</sub>

〔愚昧記〕承安三年正月九日、今日左相府始渡給<sub>○中</sub> 羞饌<sub>相府陪膳大學</sub> 二獻之後居冷汁、三獻熱汁、